

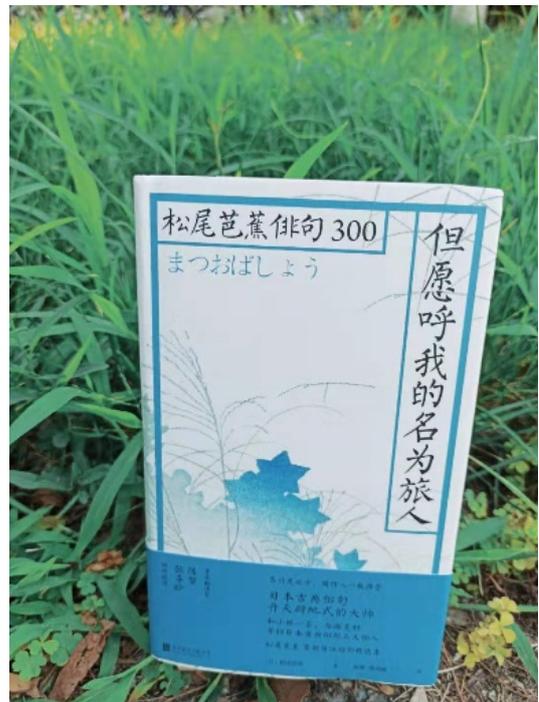
松尾芭蕉との出会い

ヒツ シン

教育学部 交換留学生 中国

松尾芭蕉という名前に初めて出会ったのは、自国の大学の日本概況の授業でのことでした。授業では私は江戸時代の内容の発表を担当し、文学の部分では松尾芭蕉と彼の代表作である、「奥の細道」を簡単に紹介しましたが、具体的な内容はよく理解しておらず、授業が終わった後は、松尾芭蕉や俳句のことを忘れてしまいました。

松尾芭蕉との再会は、本屋の日本文学に分類された棚で、小さな本を見つけたことでした。『但愿呼我的名为旅人：松尾芭蕉俳句300』という本で、タイトルは「旅人と我が名呼ばれん」という意味です。この本は芭蕉の俳句を300句選んで中国語に翻訳して、解説もついています。私は一目でそのタイトルに惹かれました。なぜこの本に詩のような名前をつけたのか。それを買って、家に帰ってすぐに読み始めました。この本の翻訳者は陳黎と張芬齡で、台湾の有名な詩の翻訳家として知られています。彼らは、この本の翻訳にあたって、俳句の言葉の意味を単純に中国語に置き換えるのではなく、芭蕉の俳句の持っている雰囲気や心境を伝えています。そして、従来翻訳者のように俳句を漢詩の格式に訳すのではなく、短く巧みな俳句の特徴を残すように工夫しています。読んでみると、俳句の巧みに気づいて、短い音だけで季節や自分の感情などを表現するのはすごいと思いました。この本を読んで、印象に残ったのは、「櫓の声波ヲ打つて腸凍ル夜や涙」という俳句です。この俳句を読んだ時に、自分も船の中にいるような気がして、急に寒さと悲しみが押し寄せてきました。このような短い言葉に大きなインパクトがあるとは思いませんでした。



松尾芭蕉との3回目の出会いは、和歌山大学の、Collins 教授の古典文学翻訳の授業や松下先生の日本文化入門の授業で、松尾芭蕉の「奥の細道」を再読したことです。

人の平均寿命が50歳の江戸時代に、芭蕉は40歳過ぎの高齢で旅立って、二千四百キロを歩いたということが、私には想像できないのです。私は「行春や鳥啼魚の目は涙」という俳句が非常に美しいと思います。春が暮れて、鳥が啼いて、魚が涙を流すという詩句に沿って淡い感傷がゆっくりとやってきます。これが「惜春」というものかもしれません。

松尾芭蕉の俳句を読んでみると、彼が人に与えるイメージは非常に多様だと思います。「冬の日や馬上に氷る影法師」を読むと、彼が孤独な旅人であるような気がします。「露とくとく試みに浮世すすがばや」の場合は、心が冷めた老僧であるような気がします。しかし、松尾芭蕉は童心に満ちている一面もあります。例えば「あら何ともなや昨日は過ぎて

河豚汁」、「愚に暗く茨を掴む蜚かな」などの詩句を読むと、彼は可愛い子供のようにも思えます。「月十四日今宵三十九の童部」という彼の俳句がいうように、39歳とはいえ、まだ子供です。

松尾芭蕉との三回の出会いを通して、私の心の中で彼のイメージが変わっていったような気がします。最初の単純な文学の大家という薄っぺらなイメージから、後の生き生きとした孤独な旅人のイメージへと変化しました。松尾芭蕉と弟子の坪井杜国は春に奈良や大阪などの桜を見に行き、四月には京都に着きました。京都で坪井杜国と別れましたが、これが坪井杜国とのさよならでした。芭蕉にとって杜国は弟子だけでなく、知己でもありました。二人の笠に「乾坤無住同行二人」と書いたように、天と地の間に旅行して、同行する人は君と私二人です。杜国を失った芭蕉は、人生の旅で同行した人を失って、孤独な旅人になりました。

人生も孤独な旅ではないかと思えます。大学に入ってから、いつのまにか、高校の友達との話が少なくなりました。携帯電話のような先進的な通信設備があっても、共通の話題は少なくなって、なんとなくお互いが遠ざかっていくような気がしました。

ある人は人生を電車にたとえて、多くの人は降りて、乗って、でも、最後は一人で人生の終着駅にたどり着くと書きました。電車と違って、松尾芭蕉は人と人の出会いを桜にたとえました。「命二つの中に生まれたる桜哉」では、久しぶりに旧友と再会し、別々の人生を歩んでいた二人だが、出会った時には二人の心の中に同じ桜が咲いています。日本では「桜は七日」という言葉がありますが、桜の花の命は、わずか七日間だけで、短い時間ですが、とてもきれいです。人と人との出会いも、桜と同じように短いけれど美しいのかもしれない。

松尾芭蕉は「旅人」を自任して旅行し、旅の途中で死にました。松尾芭蕉には旅行者のイメージがぴったりかもしれません。「住みつかぬ旅の心や置火燧」、旅人だけが彼の心を理解できるのかもしれない。松尾芭蕉の俳句は旅行中で作られたものが多く、旅行中で読むのにも適しています。今中国の若者の間で、こういう言葉が流行しています。「生活には目先の苟且だけでなく、詩と遠方もあります。」、その意味は、「今の生活に縛られるのではなく、遠くの理想を追い求めるべきだ」、ということです。松尾芭蕉を読むと、「詩と遠方」に新しい気づきがあります。

【参考文献】

- ・ 陳黎、張芬齡『但愿呼我的名为旅人：松尾芭蕉俳句300』（2019年、北京聯合出版社）
- ・ 徐建雄『奥之細道』（2020年、浙江文芸出版社）

My meeting with Matsuo Basho

BI CHEN

Faculty of Education, Exchange Student/China

Haiku, as a kind of Japanese characteristic literature, is very important in the Japanese literary circle. As a master of haiku in Japan, Matsuo Basho, known as "sage of haiku", played a pivotal role in the development of haiku art in Japan. As a Japanese learner, I have had three encounters with Matsuo Basho and his works. The first time was in the presentation of the class. In the process of preparing for the presentation, I had my first encounter with Matsuo Basho. The next time I met Matsuo Basho, I happened to read a collection of his haiku poems in a bookstore. The third time I met Matsuo Basho was in the class at Wakayama University, where I studied his book *Oku no hosomichi*.

Through these three encounters, I felt the charm of haiku. The short 17 syllables can express the season and their feelings. Although the number of words is not much, emotional rendering is extremely strong. Reading his haiku, I feel as if I were in the scene and traveling with him.

For me, there are many images of Matsuo Basho. Sometimes he is a lonely traveler; Or like an old monk; And occasionally as cute as a child. Matsuo Basho spent the last ten years of her life traveling and died in the process. Perhaps the most fitting image for him is a traveler.

我和松尾芭蕉先生的相遇

毕晨

教育学部 交换留学生/中国

俳句作为一种具有日本特色,在日本文学界极具重要。而松尾芭蕉作为日本的俳句大师,被称为“俳圣”的他对于日本的俳句艺术发展的作用是举足轻重的。我作为日语学习者,曾有三次接触到了松尾芭蕉先生及其作品。第一次是在课堂的发表上,在准备发表内容的过程中,是我与松尾芭蕉的第一次相遇。第二次和松尾芭蕉的相遇是在书店,我偶然间阅读了他的俳句集。第三次与松尾芭蕉的相遇是在和歌山大学的课堂,学习了他的著作《奥之细道》。

通过这三次和松尾芭蕉的相遇及对其俳句的阅读,我感受到了俳句的魅力。短短的17个音节就可以将季节和自己的情感表达出来。字数虽不多,渲染力却极强。读他的俳句,仿佛自己身临其境,在和他一起旅行。

在我看来,松尾芭蕉有许多形象,有时他是一名孤独的旅人;又像是一名已经看破世间的老僧;偶尔又像孩童一样可爱。松尾芭蕉在旅行中度过了自己最后的十年,也在旅行的过程中溘然长逝。可能对他来说,最贴切的形象莫过于旅人吧。